早稲田大学演劇博物館演劇映像学連携研究拠点
Collaborative Research Center for Theatre and Film Arts, Theatre Museum, Waseda University

NEWS LETTER 10

March 2020 Number

ご挨拶

演劇映像学連携研究拠点代表　岡室 美奈子

演劇博物館が運営する演劇映像学連携研究拠点は、文部科学省より2009年に認定を受けた共同利用・共同研究拠点です。2014年の再認定以降は5つの共同研究チームが共同研究を行い、6年にわたり活動を行ってきました。本拠点では、母体が100万件を超える資料を収蔵する演劇博物館であることを活かし、①当館所蔵の貴重な一次資料を共同研究に供すことで、演劇研究・映像研究の充実した学術的成果を上げるとともに、②資料のデジタル画像と目録という共同研究の成果をデータベースでの公開に繋げ、研究成果を更なる研究へとダイナミックに開いてきました。

最終年度の2019年度も、昨年度から続く5つの共同研究チームが資料の調査・考証を行いました。1件のテーマ研究チーム（「坪内逍遙・坪内士行資料の基礎的調査研究」）と4件の公募研究チーム（「栗原重一旧蔵楽譜を中心とした楽士・楽団研究」、「戦後日本映画における撮影所システムの変遷とその実態」、「マルチマテリアルを基礎とした立正活映作品の復元」、「描かれた中国演劇と大正期日本」）が、丹念に資料の考証を行い、研究論文や口頭発表による様々な演劇研究・映像研究の成果を発信しました。

こうした共同研究事業とともに、2019年度には本拠点の主催事業として、これまでの蓄積を活かした複数の活動を実施しました。まず、演劇博物館所蔵の「河鍋暁斎画新富座妖怪引幕」が大英博物館に展示されたことを機に、これを高精細でデジタル撮影し、凸版印刷株式会社との共同研究事業として、この高精細の資料画像を活用したアニメーション

ジャパン・ハウス ロンドンでの講演（岡室美奈子拠点代表）
A lecture at Japan House London (Director Minako Okamuro)

と、タブレット端末を使って閲覧できるデジタル・コンテンツを作成しました。また6月には、2016年度から続くバーミンガム大学との共同研究事業の一環として、古典芸能の資料とデジタル技術を組み合わせた取り組みを多角的に検討する国際シンポジウムを、ジャパン・ハウス ロンドンで開催しました。これらの成果はその後、演劇博物館の常設展示内に特別コーナーを設けて一般公開し、多くのお客様からご好評いただきました。

11月には過去の映像表現とデジタル技術が現在どのように交差しているのかを問う催しとして、シンポジウムと映画上映会「デジタル時代のサイレント映画」を開催しました。また、2016年度から続けてきた「くずし字OCR」については、これまでの成果をより充実化させる試みとして、2つの丸本の全文検索やくずし字字形データセットの精緻化を図りました。

さらに、再認定期間の最終年度である本年度は、共同研究の成果を広く公開し、今後の研究に繋げるべく、共同研究のなかで蓄積されてきた資料目録を資料概要とともに大部の目録として発行します。併せて著作権等に配慮しながら、これまでデジタル化されてきた資料画像を総計20件のデータベースとして公開する予定です。

当拠点は今後も、演劇博物館が所蔵する豊かな研究資源を活用しながら、海外の研究機関とも連携した国際的な共同研究のハブとして活動していく所存です。今後もみなさまのご支援とご協力を賜りますよう心からお願い申上げます。

contents

■拠点代表あいさつ　1 p
■拠点主催事業　2 p
■令和元（2019）年度　テーマ研究成果報告　4 p
■令和元（2019）年度　公募研究成果報告　5 p
■Mission and Vision　9 p
■Projects Organized by the Center　10 p
■Report on principal research findings, fiscal 2019　12 p
■Report on the selected research findings, fiscal 2019　13 p

拠点主催事業

本年度は当拠点の主催事業として主に3種の取り組みを行い、国際的な共同研究拠点としての活動を行うとともに、デジタル技術を使って資料の保存と共有を進め、6年間にわたる共同研究事業の総括として膨大な研究成果を公開した。

「河鍋暁斎画新富座妖怪引幕」関連事業

2019年、大英博物館のマンガ展「The Citi exhibition Manga」（会期：5月23日～8月26日）において、演劇博物館所蔵の「河鍋暁斎画新富座妖怪引幕」という巨大な歌舞伎の劇場幕が目玉資料のひとつとして展示された。演劇博物館がこれを機に、貴重ながら劣化も進みつつある「妖怪引幕」を高精細でデジタル化したことを受け、当拠点はこの高精細デジタル画像をたんなる記録にとどめず、さらなる利活用に開く取り組みとして、凸版印刷株式会社との共同研究事業を行った。まず「妖怪引幕」の高精細画像を活用したアニメーションを作り、妖怪たちが生き生きと動く様子を表すことで、この資料に新たな息吹を吹き込んだ。また、タブレット端末用のデジタル・コンテンツを制作し、妖怪の元になった役者たちの画像や情報と重ねて引幕を閲覧できるようにした。これらはデジタル技術を活用することで、妖怪引幕の魅力と文化資源としての利活用の可能性を拡張するものである。

6月29日にはこうした取り組みを多角的に検討する契機として、イギリスにおける日本文化の発信拠点のひとつであるジャパン・ハウス ロンドンとの共同主催により、国際シンポジウム「Classical Arts×Digital Technologies」を開催した。ここでは2016年度より続くバーミンガム大学との連携を活かして、同大学の研究者を大英博物館の研究者ともに招き、事例を通じて「妖怪引幕」などの古典芸能関係資料をふくむ、多様な資料を最新のデジタル技術を使って蘇らせる日英の様々な取り組みについて討議を行った。このシンポジウムは、早稲田大学の笠原博徳副総長の開会の挨拶により始まり、満席の会場で行われた。第1部「デジタルテクノロジーで甦る古典芸術・芸能」では、演劇博物館の岡室美奈子館長、バーミンガム大学講師のマット・ヘイラー氏、早稲田大学のドミニク・チェン准教授が登壇し、現代のデジタルテクノロジーによって伝統的な文化・芸能がどのように現代・未来へと保存・活用されうるのかをめぐり講演を行った。次いで第2部「妖怪引幕について」においては、大英博物館アジア局日本部門長のティム・クラーク氏、大英博物館アジア局日本部門キュレーターのニコル・クーリッジ・ルマニエール氏、演劇博物館の児玉竜一副館長が講演を行った。ここでは「妖怪引幕」の日本美術史における位置づけや旧蔵者の遍歴などが多角的に論じられた。シンポジウムはバーミンガム大学のロビン・メイソン副学長の閉会の挨拶により幕を閉じ、デジタル技術を使って人文学の対象に新たな展開をもたらす試みの意義、そして国際的な共同研究の重要性が再確認された。

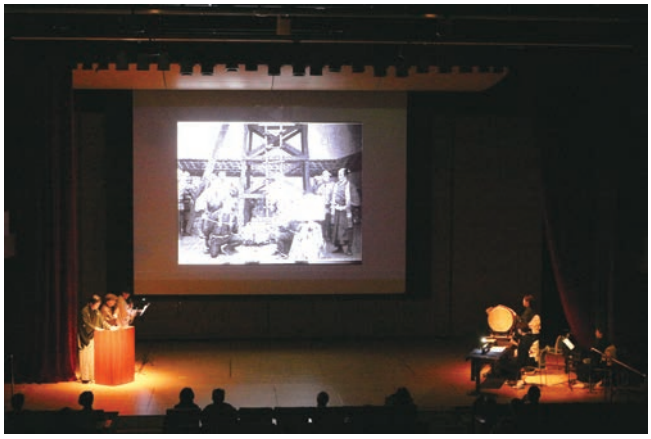
11月からは、演劇博物館の常設展示室内で、先述の成果を発展的に展示し、実感をもってこの貴重な劇場幕の魅力を体感できる場を設置した。「妖怪引幕」のアニメーションを4Kプロジェクターにより110インチのサイズで投影するとともに、タブレット端末用コンテンツを大型モニターにつないで巨大な「妖怪引幕」の原寸大表示を可能にし、さらに1/6レプリカを作成して「妖怪」モデルとされた歌舞伎役者たちの情報をパネルとして展示した。

国際シンポジウムのチラシ
Flyer for the international symposium

常設展示室の「妖怪引幕」特設コーナー
The *Yokai Hikimaku* Special Installation Corner
in a Permanent Exhibition Room

シンポジウムと映画上映「デジタル時代のサイレント映画：映画『カツベン！』を事例に」の開催

11月23日には、共同研究事業を通して本拠点に蓄積されてきた成果を活用して、シンポジウムと映画上映「デジタル時代のサイレント映画　映画『カツベン！』を事例に」を開催した。シンポジウムでは、サイレント映画の上映空間を現代に甦らせた映画『カツベン！』（周防正行監督、2019年）を手がかりに、サイレント映画をふくむ古い映画作品の復元や再現に光を当て、デジタル時代における映像表現の問題や可能性を討議した。『カツベン！』のVFXスーパーバイザーを務めた野口光一氏は『カツベン！』で採用されたデジタル技術を使ったサイレントフィルムの「再現」プロセスやデジタル技術を使った映像表現の多様性を説明し、国立映画アーカイブの大傍正規氏はフィルム保存とデジタルリマスターをめぐる問題やフィルム独自の可能性を指摘した。活動写真弁士の片岡一郎氏は、デジタルリマスターによる鮮明なデジタル映像には不鮮明な16ミリフィルムの映像と異なる語りが求められると実演を交えて説明し、デジタル時代における映像と弁士の新たな展開を示唆した。また併せて行われた上映会では、演劇博物館所蔵のサイレント映画『雷門大火血染の纏』が片岡一郎氏ら弁士３名による声色掛け合い、堅田喜三代氏ら邦楽演奏家３名による下座音楽のライブパフォーマンスとともに上映され、現在と異なる過去の多様な映画上映のあり方を鮮やかに提示した。



『雷門大火』上映の声色掛け合いによる上映
A screening of *The Great Fire at Kaminarimon* with accompanying dialogsue by three *benshi*

くずし字判読支援事業

2016～18年の機能強化支援事業によって推進した「「くずし字OCR」を活用した総合的古典籍データベースの構築」事業の成果を充実化させる取り組みとして、翻刻した２点の浄瑠璃丸本の全文データを検索できるようにしたほか、これまで蓄積したくずし字の「字形データ」をくずし字の元になった字母毎に分類し直すことで、初学者の学習にもより有意義なかたちへと字形データの活用可能性を拡張した。

更新された字形データセット表示画面
Recategorized version of the character style database of *kuzushi-ji*

共同研究対象の資料目録の発行と資料データベース公開作業

当拠点の６年間にわたる共同研究事業では、多岐にわたる13分野（近代演劇２件、現代演劇２件、東洋演劇２件、初期映像文化1件、映画４件、音楽２件）の資料が研究され、併せて資料のデジタル化と目録化が進められてきた。この成果の総数は令和２年１月末日時点で、資料目録13790件、デジタル画像82622件に上る。本年度は本拠点の再認定期間の最終年度の事業として、これらの成果を更なる研究に繋げるべく、これまでに作成された13種の資料目録に新たに執筆された資料概要を加え、大部の資料目録冊子を発行した。さらに、資料目録のデータはデジタル画像と併せ、2019年度末までに（著作権等に配慮しながら可能な範囲で）早稲田大学文化資源データベース上で総計20種のデータベースとして公開予定である。

６年にわたる演劇映像学連携研究拠点の活動によって、演劇博物館の文化資源は数々の共同研究に開かれ、多くの研究が蓄積されてきた。これらの成果が今後さらなる演劇研究・映像研究の活性化に貢献することを期待したい。

（柴田康太郎）

○テーマ研究
テーマ研究は本拠点が提案したテーマに関する共同研究プロジェクトで、研究者の参加を広く呼び掛けるものです。下記のプロジェクト・メンバーの肩書および所属は年度開始時点のものです。

テーマ研究 1

坪内逍遙・坪内士行資料の基礎的調査研究

研究代表者：濱口久仁子（立教大学異文化コミュニケーション学部兼任講師）
研究分担者：菊池明（早稲田大学演劇博物館招聘研究員）*、小島智章（武蔵野美術大学非常勤講師）、松山薫（早稲田大学教育・総合科学学術院非常勤講師）、水田佳穂（早稲田大学演劇博物館招聘研究員）、柳澤和子（早稲田大学教育・総合科学学術院非常勤講師）

【研究目的】

本研究では、未整理状態にある逍遙宛の書簡全点の目録化を完了させるとともに、『坪内逍遙書簡集』に関連する書簡を中心として、順次、翻刻公開する予定である。逍遙宛書簡の整理、翻刻・研究は、『坪内逍遙書簡集』収録の年代未詳書簡の年代推定や、往復書簡としての内容研究を可能にし、逍遙の活動や当時の背景、交流において新たな側面を明らかにするものと期待され、現在進行中の「逍遙日記」再校訂にも資するものと思われる。

また、本研究を機に調査を着手した士行資料は、近年その多彩な演劇活動への評価が高まっている人物の資料として公開が待たれており、原稿、台本、チラシ、書簡、写真から、戦前の新文芸協会や宝塚新劇団の計画、宝塚や東宝での新劇活動、戦後の日本舞踊の評論といった、近代日本演劇史・舞踊史における士行の業績がより具体的に明らかになるものと期待される。

【研究成果の概要】

○坪内逍遙資料

今年度は逍遙宛書簡貼込帖「内田魯庵書簡集」他計7冊379通をデジタル撮影し、木谷蓬吟書簡他計46通を『演劇研究』43号に翻刻掲載した（濱口・小島・松山・柳澤「〈坪内逍遙宛諸家書簡5〉坪内逍遙宛楳茂都陸平・木谷蓬吟・島村抱月・中條百合子（宮本百合子）・中條葭江書簡」）。また2014年度から整理・デジタル化してきた全資料のリストを再点検し、整理資料の保存のために中性紙に挿み込む作業を行った。デジタル化が完了した資料の総数は書簡2,410通、その他の資料339件、貼込帖28冊に及ぶ。その内逍遙宛書簡234通は、翻刻済の逍遙書簡と照合して年代の確定を進め翻刻掲載し、逍遙と周辺の人々の交流が具体的に解明出来た。当コレクションには書簡以外の様々な資料も含まれている事が判明し、今後さらに精査することにより逍遙と同時代の文化人の多様な活動の実態が明らかになることが期待される。

*研究分担者の菊池明氏は令和元年6月7日に逝去された。

○坪内士行資料

これまで資料的限界から顧みられることの少なかった、士行の芸術活動だが、本コレクションは、自伝『越しかた九十年』（青蛙房、昭和52年4月20日）の記載を裏付ける資料群である。全集の刊行を夢見て、戯曲や随筆の著作目録を幾度も書き出し、上演脚本集や雑誌から切り取ったものを束ねて支度した跡がみえる一方、たとえ士行にとっては「残骸」であっても、戦前の新劇活動を辿ることができる。本年度の考証作業により、原稿1,084点、上演資料355点、写真1,085点の目録が完成した。今後、年表作成や論考での活用により、士行の業績の再評価がなされるはずである。

包み紙「新文芸協会残骸」年月未詳［TSK0001282］
Wrapping paper, “Ruins of the Shin Bungei Kyokai,” date unknown.

大正11年3月大阪新町演舞場上演「長生新浦島」　久保田金僊画　乙姫・侍女・浦島の衣裳デザイン（坪内逍遙作上演劇材料貼込帖「長生新浦島」206-006より）［TSZ-206-006_P012］
March, 1922. Performance at the Osaka Shinmachi Theatre, “Chosei Shin Urashima” Kinsen Kubota, costume design for Otohime, Maid, and Urashima (From “Chosei Shin Urashima,” a scrapbook of theatre materials for plays written by Shoyo Tsubouchi)

筆谷等観画　乙姫髪・冠デザイン（同上）［TSZ-206-002_P020］
Tokan Fudeya, design of Otohime’s wig and crown (Same as above)

■令和元（2019）年度
公募研究成果報告

○公募研究
公募研究は審査を経た研究計画に基づく複数の共同研究プロジェクトにより構成され、演劇博物館の収集品の有効利用を目指すものです。プロジェクトに対し、本拠点は共同研究の場と資料を提供します。下記のプロジェクト・メンバーの肩書および所属は年度開始時点のものです。

公募研究 1

栗原重一旧蔵楽譜を中心とした楽士・楽団研究
――昭和初期の演劇・映画と音楽

研究代表者：中野正昭（明治大学文学部兼任講師）
研究分担者：紙屋牧子（国立映画アーカイブ特定研究員）、白井史人（名古屋外国語大学世界教養学部講師）、武石みどり（東京音楽大学音楽学部教授）、毛利眞人（音楽評論家、早稲田大学演劇博物館招聘研究員）、山上揚平（東京藝術大学音楽学部非常勤講師）

【研究目的】

栗原重一（1897-1983）は、昭和初期にエノケン楽団、松竹キネマ演芸部、さらにトーキー初期のPCL映画製作所などで活躍した音楽家である。本研究はその旧蔵楽譜の一部である「エノケン楽団・栗原重一旧蔵楽譜」の調査・分析を行う。楽譜資料の基礎調査を出発点に、同時代の文献や関連資料、関連楽譜コレクションの調査を組み合わせて研究を進める。さらに昭和初期の楽士・楽団の領域横断的な活動実態から、同時代の劇団や映画館における作品生成や興行のあり方を具体的に解明することを目指す。

【研究成果の概要】

本年度は新規購入分の旧蔵資料のデジタル化・目録作成を行い、関係者への聞き取りや同時代の文献・映像資料を絡めた考証を進めた。

○第２次購入資料のデジタル化・目録作成

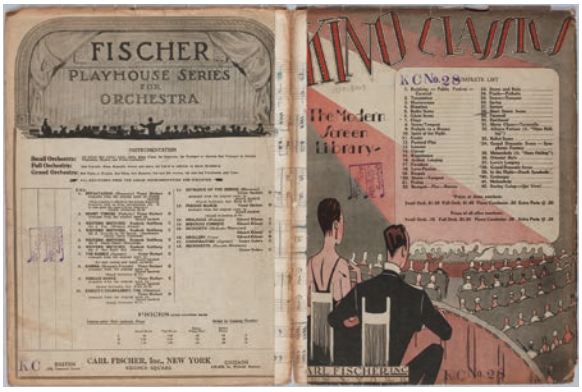
2017年度に追加購入した栗原旧蔵資料（第２次購入分）の調査を開始し、約270点のデジタル化および目録作成を進めた。第1次購入分でも確認することができた印刷譜および手稿譜の伴奏曲に加え、第２次購入分の資料には、旧蔵資料の来歴や使用の実態をより明確に示す楽譜集や、作品別の楽譜も含まれていることが分かった。

○インタビューおよび成果公開

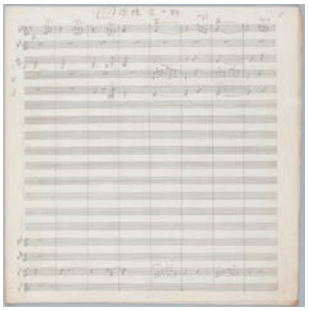
楽譜資料調査に加え、当資料を栗原の遺族から譲り受けて所蔵していた瀬川昌久氏にインタビューを行い（2019年３月、６月、９月）、資料入手の経緯を伺い、瀬川氏が所蔵する関連資料の調査を進めた。旧蔵資料は、榎本健一の楽団で活動していた音楽家の紹介で、栗原氏の遺族から瀬川氏のもとへ譲渡されたことが判明した。

これらの成果を踏まえ、研究分担者による共著論文等の発表を行うとともに、瀬川氏を招き公開研究会「エノケン喜劇の音楽とその時代」を開催した（2019年12月26日）。第1部での映画やラジオ等における『孫悟空』の音楽に関する白井の発表、サイレント映画伴奏譜の流用に関する柴田康太郎（演劇博物館）の研究発表に続き、第２部の座談会では榎本健一が出演する映画の具体的な場面を、瀬川氏と共同研究者が分析・検討した（進行：毛利）。演劇、レビュー、映画へとジャンルを超えて展開した榎本の作品と音楽との関係を、同時代の動きのなかで浮かび上がらせることができた。

今後は、散逸した可能性がある旧蔵資料や関連楽譜資料のさらなる収集を進め、演奏・上演への活用の可能性を探る必要がある。２年間の基礎的調査および考証は、より広い枠組みでの日本近代音楽史の実証的研究への確かな足掛かりとなろう。



『Kino Classics』シリーズ表紙［KRH47480_0001］
“Kino Classics” Series Cover


「孫悟空の歌」『エノケンの孫悟空』
（1947年、舞台公演）［KRH47320_008］
“The Song of Son Goku” Enomoto Ken’itchi’s
Son Goku (1947, stage performance)

公募研究 2

戦後日本映画における撮影所システムの変遷とその実態——日活ロマンポルノを中心とした実証的研究

研究代表者：碓井みちこ（関東学院大学国際文化学部准教授）
研究分担者：河野真理江（立教大学非常勤講師）、鳩飼未緒（早稲田大学大学院博士後期課程）、ファン・ギュンミン（明治学院大学非常勤講師）、藤井仁子（早稲田大学文学学術院教授）

【研究目的】

成人映画のプログラム・ピクチャーである日活ロマンポルノは、撮影所システムの最後の砦として、戦後日本映画史上きわめて重要な役割を果たした。本共同研究では、演劇博物館所蔵のロマンポルノのプレスシートの整理及び内容調査を通じて、ロマンポルノの時代を中心に、プログラム・ピクチャーの製作から興行までを手掛けた撮影所としての日活の歴史を多角的に考察する。また、配給や興行といった側面の実態解明に最適であるにもかかわらず、学術的に活用されてこなかったプレスシートを研究対象とすることで、新たな映画研究の方向性を提示することを目指す。

【研究成果の概要】

本チームは、1960年代後半～1990年代初頭の日本の成人映画プレスシート全1,235点で構成されるコレクションを整理・調査の対象とし、その大半を占める日活ロマンポルノのプレスシートに関する研究を中心に行ってきた。今年度の研究成果は主に以下の4点である。

○非日活作品プレスシートの整理・目録化

東映・OPチェーン・新日本映像（エクセスフィルム）の作品のプレスシートについて整理と目録化を行い、昨年度作業を行った日活作品のプレスシート分と併せ、全資料の目録が完成した。

○日活作品プレスシートのデジタル化と宣伝惹句の文字起こし

日活作品プレスシート全771点のデジタル化が完了した。また一部については、プレスシート裏面の宣伝惹句の文字起こしを行った。

○元日活企画部栗原いそみ氏へのインタビュー

ロマンポルノ時代の日活関係者の証言は数多く残されているものの、女性スタッフの経験はあまり語られてこなかった。そこで数少ない女性としてロマンポルノ作品の企画に携わられた栗原氏にお話をうかがった。

○公開研究会「ロマンポルノ研究の過去・現在・未来」の開催

公開当時におけるターゲットには当てはまらない観客として、いわば「外側」からロマンポルノを受容してきた若手研究者4名が登壇し、ロマンポルノという事象、またその作品群に対する学術的アプローチの方法を多角的に探ることを試みた。

今年度は、映画研究におけるプレスシート活用の可能性だけでなく、いまだ全体像に迫る研究が行われていないロマンポルノに研究者がどのように向き合うことができるかを模索した。とりわけ、昨今ジェンダーやセクシュアリティの問題が関心を集めていながら、ロマンポルノをそうした観点から論じる試みはほとんどなされてこなかったため、女性映画研究者（研究分担者の河野・鳩飼・ファン）とクィア映画研究者（演劇博物館助教の久保豊氏）が登壇して多角的な議論を行った公開研究会は、先駆的かつ2年間の共同研究の集大成にふさわしい成果であったと考える。

『団地妻　昼下りの情事』プレスシート小　表面［NFM6000505］
"Apartment Wife: Love in the Afternoon," Small press sheet, front side

『花と蛇』プレスシート大　裏面［NFM6000107］
"Flower and Snake," Large press sheet, reverse side

『花と蛇』プレスシート小　裏面［NFM6000169］
"Flower and Snake," Small press sheet, reverse side

『団地妻　昼下りの情事』プレスシート小　裏面［NFM6000505］
"Apartment Wife: Love in the Afternoon," Small press sheet, reverse side

公募研究 3

マルチマテリアルを基礎とした立正活映作品の復元

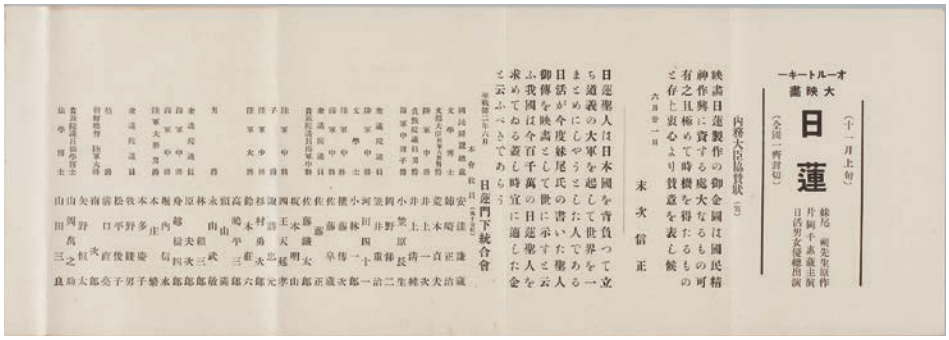
研究代表者：上田学（神戸学院大学人文学部准教授）
研究分担者：板倉史明（神戸大学大学院国際文化学研究科准教授）、近藤和都（大東文化大学社会学部講師）、スザンネ・シェアマン（明治大学法学部教授）、ローランド・ドメーニグ（明治学院大学文学部准教授）、仁井田千絵（立教大学現代心理学部助教）、ユリア・ブレニナ（大阪大学日本語日本文化教育センター特任講師）

【研究目的】

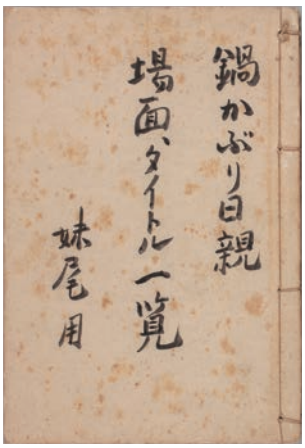
本研究の目的は、早稲田大学演劇博物館が所蔵するノンフィルムの立正活映資料を活用して、同社が製作したフィルムの表象的、環境的な復元を実現させることにある。立正活映は、牧野省三の牧野教育映画と共同で、大正末期から昭和初期にかけて宗教映画を製作したプロダクションであるが、映画史においてその足跡はほとんど知られていない。立正活映は小規模なプロダクションだったため、現存資料はきわめて限られており、復元のためには複合的な資料を用いた研究が不可欠である。本研究は、神戸映画資料館が所蔵する立正活映製作の『鍋かぶり日親』（牧野省三監督、1922年）の9.5mmフィルム（部分）とあわせ、ノンフィルムとフィルムというマルチマテリアルを映画史研究において結合させ、作品の表象的、環境的な復元を試みるものである。

【研究成果の概要】

立正活映については、御園京平編『回想・マキノ映画』（マキノ省三先生顕彰会、1971年）で言及されるのみで、映画史の先行研究ではほとんど取り上げられず、その存在は知られてこなかった 。本研究は、演劇博物館が所蔵する立正活映資料の調査分析を進め、その成果発表とあわせ、関連して神戸映画資料館で発見された『鍋かぶり日親』を上映する、公開研究会「宗教映画とスクリーン・プラクティス」（2019年11月16日、神戸映画資料館）を開催した。研究会は、事前の準備研究会（2019年5月5日）を踏まえ、立正活映資料についての調査成果を、上田学「牧野省三と宗教映画」、ユリア・ブレニナ「日蓮主義と映画―立正活映の映画製作と配給網に着目して―」として発表した。あわせてスクリーン・プラクティスの観点から、近藤和都「歴史のなかのスクリーン・プラクティス：日本における研究動向」、ローランド・ドメーニグ「光と影の大いなる術　宗教と幻燈をめぐる相関関係」、スザンネ・シェアマン「欧州から見た日本の宗教と娯楽の関係」の各発表、および共同研究者以外に赤井敏夫「近代インドと宗教映画」、福島可奈子「明治期日本のプロテスタントにおける幻燈利用――中島待乳製スライドを一例に」の各発表がおこなわれ、宗教と映像文化に関する研究状況が論じられた。こうした演博の資料群の調査分析を通じて、新たに発見されたプリントの価値があらためて定義され、これまで前景化されてこなかった日本映画と宗教の関係、とりわけ日本近代史に大きな役割を果たした日蓮主義との結びつきが示された。これらの立正活映についての研究成果の詳細は、ユリア・ブレニナ、上田学の共著論文「日蓮主義宣伝映画について――立正活映資料および『鍋かぶり日親』を中心にして」（『演劇研究』43号、2020年3月予定）にまとめた。



『日蓮』覚書［NRK46358-10］
Nichiren Memo



『鍋かぶり日親』場面タイトル一覧
［NRK46357-03］
Nabekaburi nisshin,
List of Scene Titles

公募研究 4

描かれた中国演劇と大正期日本
――福地信世『支那の芝居スケッチ帖』を中心に

研究代表者：平林宣和（早稲田大学政治経済学術院教授）
研究分担者：袁英明（桜美林大学芸術文化学群教授）、李莉薇（華南師範大学外国語文化学院准教授）、李玲（中国芸術研究院戯曲研究所副研究員）

【研究目的】

本研究課題「描かれた中国演劇と大正期日本－福地信世『支那の芝居スケッチ帖』を中心に」は、演劇博物館所蔵の福地信世『支那の芝居スケッチ帖』に関する考証を中核としつつ、梅蘭芳の二度の公演（1919年、1924年）およびその他複数の俳優による訪日公演が行われた大正期日本と中国演劇との関わりを、主に視覚資料を軸に考察し、その時代の様相の一端を明らかにすることを目的としている。

【研究成果の概要】

本研究は、当初より以下の三つの作業を並行して実施してきた。1：演劇博物館所蔵、福地信世『支那の芝居スケッチ帖』考証作業、2：福地信世研究、3：大正期の中国演劇に関する視覚資料研究。

1については、昨年度に引き続き福地が中国に滞在していた当時の資料（『順天時報』、『申報』等）により、描かれた芝居の公演情報を確認する作業を進めた。その結果については、研究拠点から発行される資料目録に反映される予定である。

また2と3については、それぞれ以下の形で成果を報告している。まず研究期間中に発表された論文としては、本研究チームの研究分担者（2018年度のみ）であった田村容子（金城学院大学）著『男旦とモダンガール二〇世紀中国における京劇の現代化』（2019）所収の「日本人の描いた京劇」、李莉薇（華南師範大学）著『近代日本対京劇的接受與研究』（2018）に収められた「福地信世和中国劇研究会対京劇的接受與研究」などがある。いずれも『スケッチ帖』を描いた当時の福地信世の、種々の活動を明らかにした論文である。

また2019年がちょうど梅蘭芳初訪日公演から百周年の年であったため、代表者である平林宣和は日中双方で行われた以下のシンポジウムに参加し、福地信世と『スケッチ帖』に関連する口頭報告を行っている。

1：「描かれた中国演劇－福地信世のスケッチを中心に」、梅蘭芳記念館主催「東瀛品梅－紀念梅蘭芳首次訪日100周年専題学術研討会（シンポジウム）」（2019年7月12日、早稲田大学）

2：「梅蘭芳訪日百年」、上海戯曲芸術中心主催「梅蘭芳訪日100周年記念公演シンポジウム」（2019年10月2日、国立劇場小劇場）

梅蘭芳訪日百年というタイミングで、梅蘭芳に縁のある福地信世、および『スケッチ帖』の研究を実施したことは、演劇史的にも大変意義深い。同時にこの活動は中国の研究者の関心を喚起し、日中双方で関連の研究を推し進める作用を果たした。研究計画終了後も、さらに複数の研究成果が生み出されることが期待される。

福地信世『支那の芝居スケッチ帖』の一部。以下の四枚のスケッチに描かれているのはいずれも梅蘭芳である。

「C14　廻龍閣」（大正10年2月23日、文明茶園）［13234-2_38］
C14 Huilongge (Feb. 23rd, 1921, Wenming Theater)

「B11　轅門射戟」（大正8年11月9日、新明大戯院）［13234-2_14］
B11 Yuanmensheji (Nov. 9th, 1919, Xinming Theatre)

「G10　打魚殺家」（大正10年4月7日、吉祥園）［13234-4_12］
G10 Dayushajia (April 7th, 1921, Jixiang Theater)

「G20　木蘭従軍」（大正9年11月20日、新明大戯院）［13234-4_22］
G20 MuLan congjun (Nov. 20th, 1920, Xinming Theatre)

Mission and Vision

Leader of the Collaborative Research Center for Theatre and Film Arts

Minako Okamuro

The Collaborative Research Center for Theatre and Film Arts, which is managed by the Theatre Museum, was certified as a "Joint Usage and Research Center" by the Ministry of Education, Sports, Science, and Technology (MEXT) in 2009. In the six years since its recertification in 2014, five joint research teams have carried out collaborative research and activities. The Center's work is founded on the collection of more than one million objects in the Theatre Museum, our parent organization. We promote academic research in theater and film by facilitating joint research into these valuable primary sources. We also focus on disseminating the results of this joint research to the public through a database of digitized images and a catalog of materials, thereby actively supporting further research.

In 2019, our five joint research teams continued their investigative work from the previous year. The principal research team ("Basic Research Survey of Materials Relating to Shoyo and Shiko Tsubouchi") and the four selected research project teams ("Research on Musicians and Orchestras, Focusing on Shigekazu Kurihara's Musical Score Collection"; "Understanding the Studio System in Postwar Japanese Cinema"; "The Restoration of the Rissho Katsuei films, based on Multiple Materials"; and "Visual Depictions of Chinese Theater and the Taisho Period in Japan") worked tirelessly, surveying and analyzing their respective materials. Each year, they have published the results of their theater and video research through research papers and oral presentations.

In addition to these joint research projects, in 2019 we organized several research projects that utilized the results we have achieved to date.

First, we collaborated with Toppan Publishing on a project that featured one of the treasures of the Theatre Museum's collection: Kawanabe Kyosai's *Yokai Hikimaku* (Kabuki Theater Curtain of the *Shintomi-za*, with Impromptu Sketches of Monsters). Using the opportunity provided by an exhibition of the *Yokai Hikimaku* at the British Museum, we created an animation and other tablet-viewable digital content using high-definition digital photographs of the curtain. In June, as part of our joint research project with the University of Birmingham (2016-), we held an international interdisciplinary symposium at Japan House London to consider initiatives that combine classical theater materials with digital technology. Subsequently, we have displayed the results of these initiatives to the public in a special corner of the permanent exhibition rooms of the Theater Museum, where they have been favorably received by the Museum's many visitors.

In November, we held the *Silent Films in the Digital Age* symposium and screening, which examined how cinematic expressions of the past and digital technologies intersect in the present day. In addition, in an effort to expand and strengthen the results achieved so far by the "*Kuzushi-ji* OCR" project (2016-), we are in the process of creating completely searchable versions of two *joruri* texts, and refining the *kuzushi-ji* (characters written in a cursive style) character form dataset.

Moreover, in the final year of the recertification period, we disseminated the results of our collaborative research widely. Looking ahead to future research, we published a collection of the materials cataloged during the joint research projects, along with introductions to the cataloged items. In conjunction with this, while taking copyright and related issues into account, we are working to make publicly available twenty databases of material that we have digitized to date.

Going forward, while continuing to make full use of the abundance of research materials housed in the Theatre Museum, we intend to remain active as a hub of international joint research in collaboration with overseas research institutions. We look forward to your continued support and cooperation in the future.

This past year at the Center, we worked on three major projects as the organizer, participated in various initiatives as an international joint research center, and used digital technologies to preserve and share materials. We also published a substantial volume of results of the joint research projects conducted over the last six years in the form of catalogs of research materials and twenty databases.

Projects Related to Kawanabe Kyosai's *Yokai Hikimaku*

One of the most impressive items in the Theatre Museum's collection, Kawanabe Kyosai's *Yokai Hikimaku* (Kabuki Theater Curtain of the *Shintomi-za*, with Impromptu Sketches of Monsters), was displayed at the Citi exhibition Manga at the British Museum (May 23 to August 26, 2019). We used this opportunity to create a high-definition digitized image of the curtain, which is beginning to deteriorate. But we did not stop at simply digitizing the curtain: with the aim of finding new ways to feature this extremely valuable piece, we began a collaborative research project with Toppan Printing. Together, we created an animation using the high-definition images of the *Yokai Hikimaku*, breathing vivid new life into the *yokai* monsters. We also prepared digital content for viewing on tablet devices, which provides users with further information and enables them to view it alongside images of the actors who were caricatured as the *yokai* monsters. This exciting use of digital technology helped us to show the appeal of the *Yokai Hikimaku* and to expand its potential as a cultural resource.

As an opportunity to explore these initiatives from an interdisciplinary perspective, on June 29 we held the *Classical Arts × Digital Technologies* international symposium jointly with Japan House London, which is one of the primary bases for disseminating Japanese culture in the UK. At this symposium, researchers from the University of Birmingham, with which the Center has collaborated since 2016, joined researchers from the British Museum to discuss how the latest digital technologies can be used to revitalize classical works. They examined various case studies in Japan and the UK, including the *Yokai Hikimaku*.

At the start of the event, Hironori Kasahara (Vice President of Waseda University) gave the opening remarks to a packed assembly hall. For the symposium's first theme, "Digital Technologies to Revive Classical Arts," Minako Okamuro (Director of the Theatre Museum), Matt Hayler (Senior Lecturer, University of Birmingham), and Dominique Chen (Associate Professor, Waseda University) took to the stage to discuss how digital technology can be utilized to preserve and engage with traditional cultures and performances in the present and future. The speakers for the second theme, "The *Yokai* Kabuki Theatre Curtain," were Tim Clark (Head of the Japanese Section, Department of Asia, the British Museum); Nicole Coolidge Rousmaniere (Curator, the Japanese Collections, the British Museum); and Ryuichi Kodama (Vice Director of the Theatre Museum). They discussed the *Yokai Hikimaku* from a variety of perspectives, including its position in Japanese art history and its history of former owners. The symposium ended with closing remarks by Robin Mason (Pro-Vice-Chancellor [International], University of Birmingham), who spoke about the significance of digital technologies in forging new directions for the humanities, and who emphasized once more the importance of collaborative international research.

Since November 2019, we have displayed the works described above in the permanent exhibition rooms in the Theatre Museum in order that visitors can vividly experience and get a real sense of the appeal of this historically valuable theater curtain. The *Yokai Hikimaku* animation is played on a 110-inch screen using a 4K projector, and the digital content we created for tablets is connected to a large monitor that is capable of displaying the enormous *Yokai Hikimaku* at its actual size. What is more, the Center has created and is exhibiting a one-sixth size replica of the curtain, which includes a panel with information about the original Kabuki actors.

Symposium and Screening: *Silent Films in the Digital Age: With the Film* Katsuben! *as a Case Study*

On November 23, utilizing the results achieved at the Center through joint research projects, we held a symposium and screening, titled *Silent Films in the Digital Age: With the Film* Katsuben! *as a Case Study*. In the symposium, discussions were held on the film *Katsuben!* (directed by Masayuki Suo, 2019), which revives the silent film screening space in the present day; the digital remastering processes of old films, including silent films; and the issues and possibilities of film expression in the digital age. Koichi Noguchi, who worked as the visual effects supervisor on *Katsuben!*, explained how the film-makers used digital technologies for their silent film "reproduction process," and discussed the diverse ways that digital technologies are being used in film today. Masaki Daibo of the National Film Archive discussed the problems in preserving and digitally remastering films, as well as the possibilities that are unique to film. Ichiro Kataoka, a silent film narrator referred to as a *benshi*, explained through a demonstration how the sharp digital images obtained from a digital master demand a narration different from that for blurry, 16-mm film images, thus suggesting new developments for film narration. In conjunction with this, Ichiro Kataoka and two other *benshi* narrated a silent film from the Theatre Museum's collection, *The Great Fire at Kaminarimon: Chizome no Matoi.* The screening was accompanied by Japanese music and sound effects performed by three musicians, led by Kisayo Katada, vividly showing how the screenings of today differ from those of the past.

Project Supporting the Decipherment of *Kuzushi-ji*

As an initiative to enhance the results of the Project to Develop a Comprehensive Database of Pre-modern Books Using *Kuzushi-ji* Optical Character Recognition (OCR) Technology, which was conducted from 2016 to 2018 through the Support Projects for Enhancing Functions, we have made all the text data in two works of *joruri* (Japanese ballad dramas) searchable. In addition, we extended the potential uses of the character data to forms that are more meaningful for learning by beginners, by recategorizing the *kuzushi-ji* character data accumulated so far in the alphabet of the original characters.

A Book of Catalogs and 20 Databases of Materials studied in the Joint Research Projects

The twelve joint research projects conducted by the Center over the last six years have involved a range of materials, covering a wide variety of fields (including two projects on early modern theater, two on modern theater, two on Eastern theater, one on early visual culture, four on film, and two on music). In conjunction with this, we have made progress in the digitization and cataloging of materials. As of the end of January 2020, the overall results of these efforts include 13,790 cataloged items and 82,622 digitized images. To connect the results of the projects in the final year of the Center's recertification period to further research, we will issue a book featuring the majority of the cataloged material in addition to a newly written summary of the thirteen catalogs prepared up to the present. Moreover, while adhering to relevant copyright restrictions, we are creating a total of 20 databases of digital images and catalogs of material that will be made available through the Waseda University Cultural Resource Database.

Over the six years of activities in the Collaborative Research Center for Theatre and Film Arts, we have initiated a number of joint research projects related to the cultural resources in the Theatre Museum's collection, and we have accumulated a large body of research results. We hope that these results will contribute to the further revitalization of theater and film research in the future. (Kotaro Shibata)

○Principal research
The principal research involves a joint research project on the theme proposed by the Institute, which researchers were encouraged to participate in. The titles and affiliations of the project members shown below are those for the year in which the project started.

Principal research 1

Basic Research Survey of Materials Relating to Shoyo Tsubouchi and Shiko Tsubouchi

Principal Researcher: Kuniko Hamaguchi (Affiliated Lecturer, The College of Intercultural Communication, Rikkyo University)
Collaborative Researchers: Akira Kikuchi (Adjunct Researcher, Waseda University Theatre Museum), Tomoaki Kojima (Part-time Lecturer, Musashino Art University), Kaoru Matsuyama (Part-time Lecturer, Faculty of Education and Integrated Arts and Sciences, Waseda University), Kaho Mizuta (Adjunct Researcher, Waseda University Theatre Museum), Kazuko Yanagisawa (Part-time Lecturer, Faculty of Education and Integrated Arts and Sciences, Waseda University)

Purpose of research

In this study, in addition to completing the cataloging of all letters addressed to Shoyo Tsubouchi, we plan to make the contents of the project publicly available by reprinting them, with a focus on letters connected to the "Collected Letters of Shoyo Tsubouchi." The organization, reprinting, and research into the letters addressed to Shoyo will open up a number of new possibilities. These include the estimation of the age of certain undated letters compiled in the "Collected Letters of Shoyo Tsubouchi," and research into the contents of these letters as letters of correspondence. This project is also expected to clarify new aspects of the background or context surrounding Shoyo and aspects of Shoyo's activities and interactions, as well as contributing to the revision of "Shoyo's Diary," which is currently in progress.

Furthermore, the publication of a survey of materials related to Shiko Tsubouchi, begun on account of research into Tsubouchi Family, is pending. There has been an increase in the evaluation of Shiko's various theatre-related activities in recent years and it is expected that, from these manuscripts, scripts, leaflets, letters, and photographs, the accomplishments of Shiko in the history of modern Japanese theatre and dance will be more extensively clarified. This includes the pre-war plans of the Shin Bungei Kyokai and the Takarazuka Shingekidan, the activities in forms of new theatre such as Takarazuka and Toho, and criticism of Japanese dance in the post-war period.

Research results

○ Shoyo Tsubouchi materials

This year, a scrapbook of letters addressed to Shoyo, totalling 379 letters in seven books, including the "Collection of the Letters of Roan Uchida," were digitized, and a total of 46 letters, including those of Hogin Kitani, were reprinted in "Studies in Dramatic Art" No. 43. (Hamaguchi, Kojima, Matsuyama, and Yanagisawa, "Various Letters Addressed to Shoyo Tsubouchi 5: Letters Addressed to Shoyo Tsubouchi from Rikuhei Umemoto, Hogin Kitani, Hogetsu Shimamura, Yuriko Chujo, and Yoshie Chujo.") Moreover, a list of all the materials organized and digitized since 2014 was reinspected, and acid-free paper was inserted into these materials for the sake of preservation. The total number of digitized materials was 2,410 letters and 339 other kinds of materials, comprising 28 scrapbooks. In addition to being reprinted, 234 letters addressed to Shoyo were compared with the already reprinted letters written by Shoyo, thereby allowing for the confirmation of their dates. This allowed for more exact elucidation of the actual interactions between Shoyo and the people surrounding him. It was also determined that this collection contains a variety of materials other than letters. Going forward, it is expected that close examination will clarify the actual state of the various activities of various cultural figures that were active during the same period as Shoyo.

○ Shiko Tsubouchi materials

Before now, the artistic activities of Shiko Tsubouchi have not been thoroughly considered, due to the limited materials available. This collection, however, contains a set of materials that substantiate the information recorded in his memoir "Ninety Years Gone By" (Seiabo, April 20th, 1977). This collection may have seemed like something of a ruin to Shiko himself, as it shows the traces of a number of attempts to compile a bibliographical catalogue of plays and essays, and to collect and prepare items taken from collections of performed scripts and magazines, with the aim of publishing a complete set of works. However, this still allows us to trace prewar new theatre activities. This year, through investigative work, a catalogue of 1,084 manuscript items, 355 performance items, and 1,085 photographic items has been completed. A reevaluation of Shiko's accomplishments should occur in the future, through the creation of a chronological table and further study and discussion.

○Selected research

The selected research consists of joint research projects derived from the reviewed proposals, which aim to promote the effective use of the Theatre Museum's collections. The Institute provides a venue and materials for these joint research projects. The titles and affiliations of the project members shown below are those for the year in which the project started.

Selected research 1

Research on musicians and musical bands regarding Kurihara's musical score collection: music for stage and cinema during the early-Showa era

Principal Researcher: Masaaki Nakano (Affiliated Lecturer, School of Arts and Letters, Meiji University)
Collaborative Researchers: Midori Takeishi (Professor, Faculty of Music, Tokyo College of Music), Makiko Kamiya (Assistant Curator, National Film Archive of Japan), Fumito Shirai (Lecturer, Nagoya University of Foreign studies), Yohei Yamakami (Part-time Lecturer, Faculty of Music, Tokyo University of the Arts), Masato Mori (Independent Researcher)

Purpose of research

Shigekazu Kurihara (1897-1983) was a musician active in the early-Showa period as a conductor and an arranger in Ken'ichi Enomoto's band, Shochiku Kinema's performance department, and the PCL (Photo Chemical Laboratory) film studio in the early days of sound films. This study involves the analysis and investigation of a portion of sheet music held by the Theatre Museum, the "Sheet Music Collection of Ken'ichi Enomoto's Band/ Shigekazu Kurihara." Starting from a basic investigation of the sheet music materials, this research project investigates and compares contemporary documents, related materials, and other sheet music collections in order to examine the creation and performances of contemporary theater troupes and movie theaters across a wide range of genres, based on the activities of musicians and bands from the early-Showa period.

Research results

This year, the digitization and creation of a catalogue for the newly purchased portion of the collection was conducted, and progress was made in investigations involving interviews of related persons, as well as documents and visual materials from the time period.

○ Digitization and the creation of a catalogue for the additionally purchased part of the collection

Research began to investigate a part of materials that was additionally purchased and added to the collection in 2017 (the second purchase), including the digitization and the creation of a catalogue for approximately 270 items. In addition to the printed and handwritten sheet music that were similar to the materials in the first purchase, the materials in the second purchase include a collection of sheet music more clearly indicating the provenance of the original materials, as well as the actual use of scores for individual works.

○ Interviews and reporting of results

In addition to investigations of sheet music materials, interviews were conducted with Mr. Masahisa Segawa (in March, June, and September of 2019), who was in possession of these materials after being granted them by Kurihara's family. During these interviews, we inquired about the circumstances under which the materials were obtained and made progress in assembling related materials held by Mr. Segawa. It was determined that the collection of materials was transferred from the Kurihara family to Mr. Segawa following an introduction from a musician in the band of Kenichi Enomoto.

Based on these results, our research group, in addition to publishing papers under joint authorship, held and invited Mr. Segawa to participate in an open research meeting called "The Music of Enomoto Ken'ichi's Comedy in its Contemporary Movement" (December 26th, 2019). The first part began with a presentation by Fumito Shirai related to the music of "Son Goku" in different fields, including theater, movie, radio and television. This was followed by a research presentation by Kotaro Shibata (Theatre Museum, Waseda University) related to the reuse of music originally published to accompany silent films. In the round-table discussion held in the second part, the specific scenes of the films that Ken'ichi Enomoto appeared in were jointly analyzed and examined by Mr. Segawa as well as the joint researchers (including the Chair, Masato Mori). The relationship between Enomoto's works and their music, which developed in a way that transcended the genres of theater, reviews, and films, was highlighted and compared to contemporary movements.

Going forward, the further assembly of Kurihara's collection, portions of which are presumably scattered and lost, will continue. There is also a need to search for the use of materials in the form of reconstructed performance. This two-year basic survey and investigation will serve as a stepping stone for further empirical research of the history of modern Japanese music within a broader framework.

Selected research 2

Understanding the Studio System in Postwar Japanese Cinema: Empirical Research on Nikkatsu Roman Porno

Principal Researcher: Michiko Usui (Associate Professor, Kanto Gakuin University)
Collaborative Researchers: Jinshi Fujii (Professor, Faculty of Letters, Arts and Sciences), Mio Hatokai (Doctoral Program, Waseda University), Kyun-min Hwang (Part-time Lecturer, Meiji Gakuin University), Marie Kono (Part-time Lecturer, Rikkyo University and Aoyama Gakuin University)

Purpose of research

The Nikkatsu Roman Porno series, made up of adult "program picture" films, played an extremely important role in the post-war history of Japanese cinema as the last bastion of the studio system. Through the organization and survey of the contents of press sheets for the Nikkatsu Roman Porno series in the possession of the theater museum, this joint research project multilaterally considers the history of Nikkatsu as a studio that managed program pictures from their production to their exhibition, with a focus on the period of the Roman Porno. Furthermore, we have aimed to suggest a new directionality for film research by using press sheets as our research materials. These press sheets have not generally been used for academic purposes in the past, despite the fact that they are ideally suited for elucidating the actual conditions of aspects such as distribution and exhibition.

Research results

Our team aimed to conduct the organization and survey of a collection comprised of 1,235 Japanese adult film press sheets, dating from the latter half of the 1960s to the early 1990s. The majority of these were Nikkatsu Roman Porno press sheets, and research therefore focused on these press sheets. The primary four research results from this year's efforts are as follows.

○ Organization and cataloging of press sheets for non-Nikkatsu films

Organization and cataloging of press sheets for the works of Toei, OP Chain, and Shin Nihon Eizo (Xces Film) were conducted. Together with the press sheets for Nikkatsu films processed last year, the cataloging of all materials was completed.

○ The digitization of press sheets for Nikkatsu films, and the transcription of their taglines.

The digitalization of all 771 press sheets for Nikkatsu films was completed. Also, the transcription of taglines on the back of the press sheets was completed for a portion of the films.

○ Interviews with Isomi Kurihara, former member of the Nikkatsu Production Department

Although many testimonies remain from figures involved with Nikkatsu during the Roman Porno period, the experiences of female staff members have rarely been touched upon. Therefore, we interviewed Ms. Kurihara, who was one of the few women responsible for the production of Roman Porno films.

○ Holding a public seminar: "The Past, Present, and Future of Roman Porno Research"

Four young researchers who, as viewers, would not have been the target audience of these films when they opened — that is, who view the films from an "external" lens — spoke about the Roman Porno as a phenomenon in Japanese film history, as well as attempting to multilaterally search for a method of academic approach with respect to this body of work.

This year, we not only researched the potential of press sheet activity within film research, but also for a way in which researchers can confront the Roman Porno films, which have so far not been studied extensively. In particular, although interest has recently grown in problems of gender and sexuality, there are hardly any attempts to discuss the Roman Pornos from that perspective. We consider this public seminar, in which female film researchers (research group members Hatokai, Hwang, and Kono) and a queer film researcher (Yutaka Kubo, assistant professor at the Theatre Museum) discussed such questions multilaterally, which was both groundbreaking and a fitting culmination of this two-year joint research project.

Selected research 3

The restoration of the Risshō Katsuei films based on multiple materials

Principal Researcher: Manabu Ueda (Associate Professor, Faculty of Humanities, Kobe Gakuin University)
Collaborative Researchers: Susanne Schermann (Professor, School of Law, Meiji University), Roland Domenig (Associate Professor, Faculty of Letters, Meiji Gakuin University), Fumiaki Itakura (Associate Professor, Graduate School of Intercultural Studies Department of Cultural-Interaction, Kobe University), Chie Niita (Assistant Professor, College of Contemporary Psychology, Rikkyo University), Kazuto Kondo (Assistant Professor, Daito Bunka University), Yulia Burenina (Adjunct Researcher, Center for Japanese Language and Culture, Osaka University)

Purpose of research

The purpose of this study is to reconsider the image and the screening environment of the films produced by Risshō Katsuei by using the non-film materials of the same company that are in the possession of the Theatre Museum of Waseda University. Risshō Katsuei worked together with Shozo Makino's Makino Film Production to produce religious films from the late Taisho period to the early Showa period, yet its existence is almost unremarked upon in existing studies of film history. Because Risshō Katsuei was a small-scale production company, surviving materials are extremely limited, and research using composite materials is essential for restoration efforts. This study is an attempt of a film-historical reconstruction of the Risshō Katsuei production *Nabekaburi nisshin* (directed by Shozo Makino, 1922) by combining multiple materials - then on-film materials of the Theatre Museum collection and the extant 9.5mm film fragment of the film in the collection of the Kobe Planet Film Archive - and reconsidering the film's imagery and the screening environment at the time of its production.

Research results

Risshō Katsuei has been left largely unaddressed by previous research in the field of film history and is therefore largely unknown. This study advances the investigation and analysis of materials related to Risshō Katsuei in the possession of the Theatre Museum. A public seminar entitled "Religious Films and Screen Practices" (Nov. 16th, 2019, Kobe Planet Film Archive) was held. This seminar combined the publication of this study's results with a screening of *Nabekaburi nisshin*, a Risshō Katsuei film that was discovered at the Kobe Planet Film Archive. During this seminar, based on a preliminary seminar (May 5th, 2019), the results of the investigation of the relevant materials were discussed in "Shozo Makino and Religious Films," presented by Manabu Ueda, and "Nichirenism and Film: With a Focus on the Risshō Katsuei Film Production and Distribution Network," presented by Yulia Burenina. In addition, from the perspective of screen practices, Kazuto Kondo presented on "Screen Practices in History: Research Trends in Japan," Roland Domenig presented on "The Great Arts of Light and Shadow: Interrelations Between Religion and Magic Lantern Projection," and Susanne Schermann presented on "The Relationship Between Japanese Religion and Entertainment from a European Perspective." In addition, aside from the members of the joint research project, Toshio Akai presented on "Early Modern India and Religious Films" and Kanako Fukushima presented on "The Use of Projection by Protestants in Meiji Japan: A Study of Slides Produced by Matsuchi Nakajima," thereby discussing the status of research related to religion and film culture. Through this analysis of the materials of the Museum, the value of the newly discovered prints was redefined, and the relationship between Japanese films and religion, which had not been extensively researched until now, as well as the connection with Nichirenism, which played a particularly strong role in the history of modern Japan, were examined. The details of the results of this research on Risshō Katsuei were compiled in a paper authored jointly by Yulia Burenina and Manabu Ueda, entitled "Propaganda Films of the Nichirenism: An Analysis of the Risshō Katsuei Materials and the Film *Nabekaburi nisshin.*" ("Theater Research" No. 43, March 2020 (scheduled)).

Selected research 4

Visual depictions of Chinese theater and the Taisho period in Japan: focusing on Nobuyo Fukuchi's *Shina no Shibai Sukecchi-cho*

Principal Researcher: Norikazu Hirabayashi (Professor, Faculty of Political Science and Economics, Waseda University)
Collaborative Researchers: Yuan Yingming (Professor, College of Performing and Visual Arts, Obirin University), Li Liwei (Associate Professor, South China Normal University), Li Ling (Associate Researcher, Chinese National Academy of Arts)

Purpose of research

The topic of this study is "Visual depictions of Chinese theater and the Taisho period in Japan: focusing on Nobuyo Fukuchi's *Shina no Shibai Sukecchi-cho*.'" Placing an investigation of Nobuyo Fukuchi's "Chinese Theater Sketchbook," which is in the possession of the Theatre Museum, at its center, this study aims to clarify an aspect of the Taisho period, with a focus on primarily visual materials. These materials deal with the relationship between Chinese theater and the two performances of Mei Lanfang (in 1919 and 1924), as well as those of a number of other actors who visited and performed in Taisho Japan.

Research results

Since its beginning, this study has been performed according to the concurrent implementation of three tasks. 1) the task of investigating Nobuyo Fukuchi's "Chinese Theater Sketchbook," which is in the possession of the Theatre Museum; 2) the study of Nobuyo Fukuchi himself; and 3) the study of visual materials related to Chinese theater in the Taisho period.

Regarding the first task, in continuation from last year, progress was made in confirming information about theatrical performances depicted by Fukuchi through the use of materials from the period when Fukuchi was in China (from the Junten Jiho, the Shanghai News, etc.). There are plans to apply the results of this work to the catalogue of material issued by the research center.

We are reporting the second and third tasks in the following forms. First, the following papers were published during the research period: Yoko Tamura (of Kinjo Gakuin University), a member of this research team in 2018, authored "The Chinese Opera as Depicted by the Japanese" for inclusion in "Nandan and the Modern Girl: The Modernization of Classical Chinese Opera in 20th Century China" (2019); Liwei Li (of South China Normal University) authored "A Study on the Reception of Chinese Opera by the Chinese Theater Study Association of Nobuyo Fukuchi" for inclusion in "Research on the Reception of Chinese Opera in Modern Japan" (2018), and so on. Both papers clarify the various activities of Nobuyo Fukuchi during the time when he wrote the "Sketchbook."

Also, as 2019 was the hundred-year anniversary of Mei Lanfang's first visit to and public performance in Japan, Norikazu Hirabayashi participated as a representative in two symposiums held jointly by both China and Japan, and provided an oral report on matters related to both Nobuyo Fukuchi himself and the "Sketchbook":

1: "Depictions of Chinese Theater: With a Focus on the Sketches of Nobuyo Fukuchi" at the "Symposium on the 100th Anniversary of Mei Lanfang's First Arrival in Japan" held by the Mei Lanfang Memorial Museum (July 12th, 2019, Waseda University)

2: "Hundred Year Anniversary of Mei Lanfang's Arrival in Japan" at the "Performance Symposium on the 100th Anniversary of Mei Lanfang's Arrival in Japan" held by the Shanghai Center of Chinese Operas (October 2nd, 2019, Small Theater, National Theatre of Japan)

Coinciding with the hundred-year anniversary of Mei Lanfang's arrival in Japan, research on Nobuyo Fukuchi and the "Sketchbook," both linked to Mei Lanfang, is of great significance to theatrical history as well. At the same time, this activity has raised the interest of Chinese researchers and resulted in operations that are pressing ahead with related research in a state of mutual cooperation. We also expect the production of a number of research results after the conclusion of the planned study.

A portion of Nobuyo Fukuchi's "Chinese Theatre Sketchbook." The following four sketches all depict Mei Lanfang.

編　集：柴田康太郎　小松加奈
翻　訳：カクタス・コミュニケーションズ株式会社
発行者：文部科学省「共同利用・共同研究拠点」
早稲田大学演劇博物館演劇映像学連携研究拠点
拠点代表：岡室美奈子
早稲田大学演劇映像学連携研究拠点
〒169-8050 東京都新宿区西早稲田1-6-1　早稲田大学早稲田キャンパス6号館
TEL：03-5286-1829　URL：http://www.waseda.jp/prj-kyodo-enpaku/

Edited by: Kotaro Shibata, Kana Komatsu
Translated by: Cactus Communications
Published by: Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology-Japan
"Joint Usage/Research Center", Collaborative Research Center for Theatre and Film Arts, Theatre Museum, Waseda University
Center Leader: Minako Okamuro
Collaborative Research Center for Theatre and Film Arts, Waseda University
Building 6, Waseda Campus, Waseda University, 1-6-1 Nishi-Waseda, Shinjuku-ku, Tokyo, 169-8050
(+81)3-5286-1829　URL: http://www.waseda.jp/prj-kyodo-enpaku/